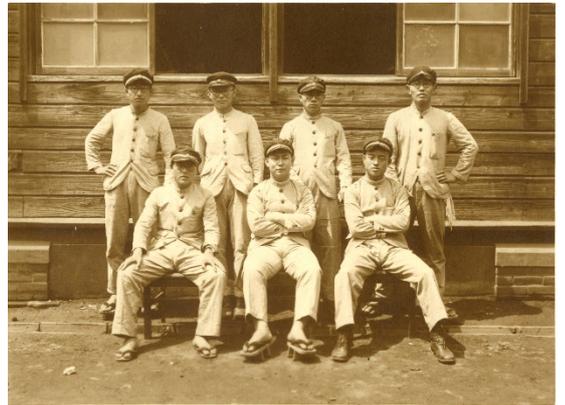


## (1) 寮生活

1931(昭和6)年4月、丸山眞男は第一高等学校文科乙類に進学した。ドイツ語を第一外国語とする文科乙類を選択したのは、語学が好きだったからである。

一高は原則として全寮制であり、丸山も東寮12番から中寮1番を経て朶寮4番へと移りながら、塙作楽(岩波書店編集者、郷土史家)、小山忠恕(義兄)、猪野健二(文芸評論家)、村本周三(第一勸業銀行頭取)、戸谷敏之(経済史学者)、杉浦民平(小説家)、堀米庸三(西洋史



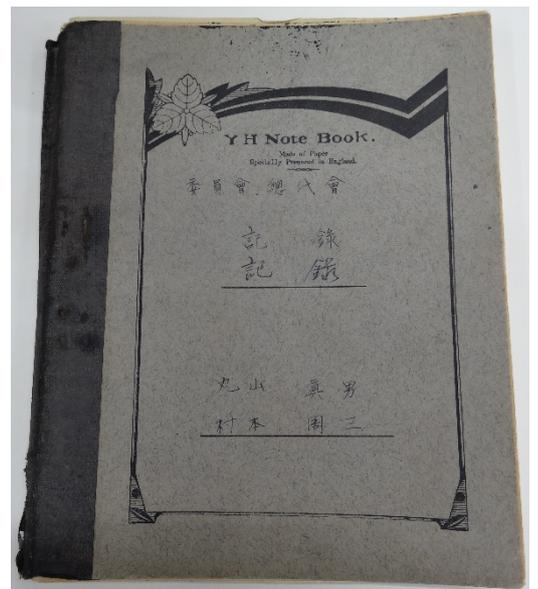
学者)、宮地健次郎(朝日新聞記者)らと交友関係をもった(肩書はいずれも後年のもの)。(画像：高等学校時代の丸山〈後列左端、丸山彰氏提供〉)

寮では学生の自治が認められていたが、「ファッション」が流行語になるほど右傾化した社会情勢と、それに対抗する形で学生たちの間に流行していた左翼思想の影響を受けて、寮生活は殺伐としたものとなっていた。寮には「瑞穂会」と「昭信会」という二つの右翼学生のサークルがあった。このうち「昭信会」は著名な右翼活動家の蓑田胸喜とつながりがあり、丸山と府立第一中学校で同級だった小田村寅二郎がのちに入会している。左翼学生の砦は弁論部と文芸部だった。ただし、対立はこうした右翼学生と左翼学生のサークルの間ではなく、ボート部を中心とする運動部・一般学生と左翼学生の間で主に生じた。寮生総会にあたる寮総代会ではたびたび激論が交わされ、雄弁な左翼学生は議論を優位に進めたが、原則全員入寮の1年生は「向陵の伝統」に弱く、総代会での多数決では大抵一般学

生派が勝利した。

丸山も、便所の落書きにあった「天皇制打倒」の文句に生理的ともいうべき不快感を覚えるなど、「反左翼」的な気風をもっていた。「教育勅語とか、学校でつめこまれるドクトリンとしての国体に対しては中学のときから反発して」おり、高校時代はデボーリンやブハーリンといったマルクス主義者の著作にも触れていたが、もっとも傾倒したのはヴィンデルバントやリッケルトといった新カント派の哲学者たちであった。張作霖爆殺事件に関連して田中義一を詰問するといった昭和天皇の態度を父幹治から聞かされていた丸山は、天皇の立場が、当時「軍部ファシズム」の攻撃対象となっていた重臣たちと同じ「リベリズム」であることを察知していた。丸山は敗戦まで「リベラル」な天皇制へのゆるぎない信者」だったのであり、「忠君愛国教育から解放されて一挙に非合法左翼運動に飛び込む同窓の学生たちを、むしろシニカルに斜めから眺めていたのである」。

丸山が東寮から中寮に転じたのは、厳しい寮内対立に嫌気がさしたことも原因であった。ところが丸山自身もやがてこの対立に巻き込まれることになる。2年次に寮委員会の庶務衛生委員となったとき、総代会でストームの禁止が提案された。ストームとは新入生の部屋に上級生が押し入り、乱暴狼藉を働く習慣である。新入生たちは上級生のストームの間、正座してい



なくてはならないため、不満の元となっていた。ストーム禁止案は可決されたが、その数

日後にボート部部員が大規模なストームを行い、この件に関連して暴行事件が発生した。委員会は暴行した学生の退寮処分を可決したが、このことは丸山にとって「非常に大きな傷となった」。退寮処分は厳しすぎると思いながらも、副委員長の雄弁に押されて退寮処分に反対できなかった自分が、社会に出て決断できるのかという自己懷疑に陥ったのである。丸山は、「学問というのは決断をしなくていい、無限のプロセスだから、その時の経験で、自分が社会に出て決断する立場になったら、自分は臆病だから、どういう間違いをすらかわからない。研究者になれば学問の論文だから、イエスかノーかはっきりしなくてもいい」と考え、研究者の道を考えるようになった。(画像：丸山眞男・村本周三『委員会・総代会記録』ノート〈丸山文庫資料番号49〉)

しかし、自治寮生活は暗いことばかりではなかった。2年次には文科乙類の学生を中心に結成された「ドイツ文化研究会」に参加したほか、同寮の有志とともにホッケー会を創設した。当初は部として認められなかったが、部屋を与えられ、ホッケー会の同志とともに寮寮4番に移った。

一方、官憲の手は着実に迫っていた。2年次の8月には、日本共産青年同盟（共産党の青年組織）の宇野脩平を含む寮寮5番の4人が一斉検挙された。このときはホッケー会に所属して4番にいた丸山は無事だった。3年次の第1学期には小山忠恕が検挙されて無期停学となり、代わって丸山が首席となった。この珍事に塙作楽は「まっさんトップとなり、寮内ために震撼す」との賛語を献呈したという。丸山が所属していた文科乙類のクラス40人のうち、治安維持法違反容疑で検挙された者は3年間で8人にのぼった。丸山が2年次だ

った1933(昭和8)年の6月には、日本共産党最高指導者の佐野学と鍋山貞親が獄中で自分たちの誤りを認め、国家主義的立場に「転向」する声明を発表した。これ以後、左翼運動からの「転向」が加速していく。